

# コンピュータを用いたプレースメントテストにおける対面オーラルアセスメントの役割： 新入生課との連携によるプログラム拡充の試み

望月良浩・曾我部絢香  
ミシガン大学

## 要旨

ミシガン大学では、2012年度より、独自に開発した computer-based placement test（以下、新 PT）を大学の新生課と連携し実施している。試験形式は、コンピュータで行う文法問題と読解問題に加え、手書きの作文と講師とのオーラルインタビューからなる。

Brown (2005) は、プレースメントテストにおいて「(文法・読解・聴解・作文の) テストスコアだけに頼って被験者の能力を測るのは無責任である」と述べ、教師が一对一のオーラルインタビューをすることの重要性を説いている。つまり、対面インタビューによって「人間味も加味することができ、テストのスコアに頼るだけよりも正確に学生のレベルを判定できる」のである。

実際、新生課と連携した新 PT のシステムでは、講師がプログラムについて受験者と個別に対話する機会が得られ、一人一人の状況に対応できるようになったと言える。新 PT 実施後に行ったアンケートでも、プレースメントテストで一番よかった点として、実際の講師と会って話すことを挙げる受験者が目立ち、対面インタビューが新生にとって日本語履修の大きな動機付けとなっていることが分かる。また、新生課との連携により新 PT が得たものは大きく、例えば、大学規模で新 PT を広報したことにより、受験者数は大幅に増え、日本語履修者数も、特に中級クラスの履修者数が増えた。

本稿では、一見、コンピュータ化に逆行しているようにも見える対面オーラルアセスメントが、受験者にどのような動機付けをもたらすか、新生課との連携によるプログラム拡充という視点から考察し、今後の展望についても述べる。

**キーワード：**プレースメントテスト CBT 対面オーラルアセスメント 新生オリエンテーション 履修者獲得

## 1. はじめに

ミシガン大学では、2010年初頭にコンピュータを用いた新しいプレースメントテスト（以下、新 PT）の開発に着手し、2011年度のパイロット版実施を経て、2012年夏学期より新 PT の本格的な実施を開始した。プレースメントテスト（以下、PT）は、アメリカ国内外の多くの日本語プログラムで実施されているものであるが、学期初めの忙しい時期に試験の準備や実施に時間を取られたり、PT の受験を希望する学生の対応に追われたりする煩雑さから、より効率的な PT が実施できないかと模索しているプログラムは多い<sup>1</sup>。本学でも、例年 100 名以上の学生が PT を受験するため、新 PT 実施前は、試験の実施とレベル分け作業は全講師総動員の大作事であった。コンピュータを用いた新 PT の開発プロジェクトは、このような状況を改善し、信頼性のあるレベル分けが効率的に行える試験を作ろうという試みから始まったものである。

新 PT は、1) 作文、2) 文法問題、3) 読解問題、4) オーラルアセスメントからなる。このうち、文法・読解問題をコンピュータ上で行い、作文は手書き、オーラルアセスメントは講師との対面インタビューである。新 PT の大きな特色として、試験の主要部分をコンピュータ化したことと、大学の新生課と連携し、新生オリエンテーション期間中に実施していることが挙げられる。特に、新生課との連携は、対面オーラルアセスメントも含め、講師と受験者が一対一で対話する機会が与えられた点において重要で、日本語履修者数の増加に繋がっているのではないかと考えられる。

本稿では、一見、コンピュータ化に逆行しているようにも思える対面オーラルアセスメントが、新 PT においてどのような役割を果たしているかを解説し、2012年・2013年度の新 PT 実施結果から、それが当初の狙い通りの成果を上げられているかどうかを考察する。さらに、2013年度に実施したアンケート結果から、講師とのインタビューが受験者にどのように受け止められ、日本語学習に関してどのような動機付けをもたらすのか、調査結果を報告する。

## 2. 新 PT 開発の目標と試験概要

本学で新 PT 以前に実施していたプレースメントテスト（以下、旧 PT）には様々な問題点があったため、当時の本学日本語プログラムにとって、新 PT の開発は急務であった。そうした状況を受けて、2010 年初頭に本格的に新 PT 開発のプロジェクトを立ち上げることとなった。この章では、新 PT 開発の目標と試験の概要を、旧 PT の問題点を踏まえながら述べる。

### 2-1. 新 PT 開発の目標

新 PT は、次の四つの目標の達成を目指し、開発を進めた。

- 異なる日本語学習歴を持つ受験者の客観的かつ効率的な評価
- 受験申し込み及びクラス登録手続きの効率化
- 試験運用業務の簡略化・人的負担の軽減
- 将来的な日本語プログラムの拡充

第一に、異なる日本語学習歴を持つ受験者を、一つの試験で、より客観的かつ効率的に評価し、レベル分けができることである。異なる日本語学習歴というのは、例えば、高校で日本語を勉強した学生、日本に留学した経験のある学生、他大学で日本語を勉強した学生、継承話者などを指す。新 PT の開発が急務となった背景には、一つに、日本語既習者のバックグラウンドがこのように多様化してきたことがある。

旧 PT には、例えば、日本語の二年生の履修を希望する学生には一年生の期末試験を受験させるというように、受験者の希望するコースの一つ前のレベルの期末試験を用いていた。言わば、アチーブメントテストを用いて PT を実施しているという状態で、語彙と文法が本学使用教科書に特化しているため、他の日本語プログラムで他の教科書を使って勉強してきた受験者の日本語能力を、筆記試験のみで効率的に評価できているとは言いがたかった。この問題は、特に初級レベルの受験者をレベル分けする際に、顕著に見られた。そこで、筆記試験だけでは判断できない部分を補うために、講師が受験者をインタビューし、適切なレベルを判断していたが、その評価基準は、本学で長年教えてきた講師の経験則に頼らざるを得ない部分があり、客観的とは言えなかった。そして、レベル間のアーティキュレーションも講師の経験則に基づいていたため、必然的に、あるレベルを教えたことがない講師には、そのレベルへ受験者をプレースすることができないという状況が生じていた。これらの事情が複雑に絡み合い、毎年のように、レベル分けの結果が適切でなく、学期が始まってからレベル間を移動する学生が数名見られたのも、旧 PT の弊害の一つであった。

このような背景から、新 PT では、客観性の高い評価基準によって、多様化する日本語既習者に対応できるような試験の開発を目指したのである。そして、その基準を講師全員で共有することで、主観的な判断に頼らず、誰が試験監督をしても同じレベル分けができることを目指した。また、試験は一本化し、全てのレベルの受験者に対応できるものを目指した。一本化というのは、旧 PT のように各レベル毎に異なる試験を用意するのではなく、初級・中級・上級の区別なく、一つの試験で全レベルのプレースメントが可能になるということである。

第二に、受験申し込み及びクラス登録手続きの効率化である。旧 PT は学期初めに一度だけしか実施されていなかったため、日本語履修のために PT を受ける必要のある学生は、試験結果が出るまでクラス登録を行うことができなかった。それによって、本来なら前学期の終わりにはできているはずの新学期の履修計画が、PT を受けるまで立てることができないとか、試験結果が出る頃には既に登録したいセクションが定員に達しているなどの弊害が生じていた。また、毎学期、PT 受験を希望する学生から山のようなメールが個別に届くという不便も生じていた。

そこで、新 PT では、本学の新生課と連携して、この問題を解決しようと試みた。本学では、夏学期中に新一年生のためのオリエンテーションが実施されているのであるが、新 PT をその一環として実施することによって、学生（特に新生）が新学期を待たずともクラス登録できることを目指したのである。新 PT の核とも言える、この新生課との連携に関しては、後ほど詳しく述べたい。

第三に、試験運用業務を簡略化し、人的負担を軽くすることである。旧 PT では、それぞれのレベルを希望する受験者ごとに、異なる試験を用意しなくてはならなかったため、各レベルの受験者数が予想できず、大量に用意した試験が無駄になることもあれば、逆に試験が足りずに急遽補充が必要になることもあった。旧 PT の試験時間は 2 時間で、試験監督とオーラルアセスメントの作業は、講師全員で取り組んでも手が回らないほどであった。そして、試験後も、採点とレベル分けの作業に同程度の時間と労力を割いた。

試験を実施する側だけではなく、受験者の側の労力や負担も大きかった。というのも、期末試験を用いていた旧 PT には、各課で学んだ細かい文法知識や語彙に関わる難易度の高い問題が多かったからである。また、自身の日本語能力を把握できていない受験者も多く、自分がどのレベルに入れるのか皆目検討もつかず、とりあえず希望してみたレベルの試験が難しすぎたり、逆に簡単すぎたりして、試験途中で一つ上・一つ下のレベルの試験に移るといことも頻繁に起こった。もちろん、そうした場合、その受験者は他の受験者よりも長く試験を受けなければならなかった。

そこで、新 PT では、試験運用を簡略化し、監督業務にあたる講師の負担を大幅に減らすことを目指した。具体的には、試験をコンピュータ化・一本化するとともに、なるべくシンプルな構成で効率的にクラス分けができるように、問題形式を大幅に見直すことにした。コンピュータ化された新 PT では、採点が自動化され、プレース結果が即時に分かるため、試験監督業務は 1 名から 3 名の講師で対応できるのではないかと予想された。

最後に、将来的な日本語プログラムの拡充である。上に述べたような諸々の問題点を抱える旧 PT のシステムは、日本語の履修者数そのものを減らしていたのではないかと考え、新 PT 導入に伴うシステムの改善によって、履修者数を増やすことができるのではないかと予想した。なぜなら、旧 PT では、試験実施日に試験が受けられず履修を諦めた学生や、そもそも PT の存在自体を知らない学生もいたかも知れないし、学期が始まる前に履修計画が立てられないという状況は、かなりの数の学生の足を日本語の履修から遠ざけていたのではないかと考えたからである。

また、新 PT の開発により試験運用業務が大幅に軽減されれば、講師は本来の業務である教材開発・教案作成に専念でき、結果として、プログラムの質は向上すると予想した。さらに、試験のコンピュータ化によって、新 PT 自体の質も向上していき、受験者をより適切にレベル分けできるようになっていくと予想した。例えば、試験結果や正誤傾向などのデータバンク化は、受験者の追跡調査を容易に可能とする。あるレベルにプレースされた学生がどのような成績でコースを修了しているか、言い換えれば、プレースメントが適切であったかどうかを容易に把握できるようになるのである。その分析結果から、必要に応じて問題を少しずつ改訂していくこともできるし、受験者の日本語学習歴や高等学校での AP (Advanced Placement) 試験の結果と新 PT の結果との相関関係を分析して、将来の問題改訂に活かすこともできるであろう。

このように、新 PT の開発は、言わば学生と講師、両者に利益をもたらすことを目標の第一に掲げたのである。

## 2-2. 新 PT の概要

新 PT の試験時間は 90 分で、その内訳は、作文 15 分、文法問題 40 分、読解問題 30 分、インタビュー 5 分である。文法問題と読解問題は多肢選択式のコンピュータ上で行うテスト (以下、CBT) で、コンピュータに日本語を直接タイプする形式の問題はない。新 PT の目標の一つであった試験の一本化を実現し、問題項目は全レベルを網羅している<sup>2</sup>。新テストをコンピュータ化するプラットフォームには、UM.Lessons と呼ばれる、本学が開発したアセスメントツールを用いた<sup>3</sup>。

作文は手書きで行い、文法・語彙・漢字の産出能力や文章構成力、思考能力を測る。インタビューでは、文法項目や語彙の産出能力を視るとともに、ACTFL OPI (American Council on the Teaching of Foreign Languages Oral Proficiency Interview) スタンダードとその抽出法をベースに総合的な言語運用能力を測る。レベル分けは、基本的に CBT のスコアを基に判断するが、文法と読解で極端にスコアに差があったり、あるレベルの基準点にわずかに届かなかったりして、判断が難しい場合は、インタビューの内容、作文の質も判断材料に加え、どのレベルにプレースするかを決定する。試験結果は試験終了後すぐに出すことができ、学生情報と試験結果のデータを入力したスプレッドシートを学部提出するだけの簡単な手続きで、受験者とアドバイザーに結果が報告されるようになった<sup>4</sup>。

2012 年度実施の新 PT を簡単に総括すると (望月・曾我部・遠藤, 2013)、2-1 で述べた新 PT の四つの開発目標はほぼ達成でき、実施初年度より、新 PT は学生と講師双方に利益をもたらしたと言える。新 PT 受験者のプレース結果には妥当性が見られ (同)、「異なる日本語学習歴を持つ受験者の客観的かつ効率的な評価」という目標は達成できたと言える。新入生課との連携により夏学期中にも PT を実施することで、「受験申し込み及びクラス登録手続きの効率化」という目標も達成できたと言えよう。言うまでもなく、PT をコンピュータ化したことで、「試験運用業務の簡略化・人的負担の軽減」も達成できた。新 PT を導入

してから、PT 受験者数が大幅に増え、日本語履修者数も増えたことから、「将来的な日本語プログラムの拡充」という目標も達成しつつあると考えられる。

### 3. 新 PT とオーラルアセスメント

CBT というフォーマットが新 PT 開発に果たした役割は大きい。小山 (2010) は、Brown (1997) を引用し、CBT の優れた点として、「個々人が都合の良い時に受けることができるという点」、「試験監督が必要ないため時間的制約に縛られないという点」、「瞬時に結果が出され、必要であれば受験者にその結果をすぐ告知することができるという点」などを挙げている。さらに、「回答時間などの受験者の回答行動もコンピュータ操作の履歴等から分析することが可能である」と述べ、データバンクによる試験問題の質の向上にも触れている。このような CBT の利点は、まさに新 PT 開発の四つの目標と本質的に合致するものである。この章では、これら開発目標のうち、特に「将来的な日本語プログラムの拡充」に焦点を当て、対面オーラルアセスメント及び新入生課との連携が、どのように日本語プログラムの拡充に貢献し得るかについて考察する。

#### 3-1. 理論的背景

新 PT の開発過程で、スピーキングとライティングの評価をどのように行うかが問題となった。というのも、スピーキングとライティングのテストを、従来通りのインタビューや紙と鉛筆による作文という形式で実施した場合、それは新 PT のコンピュータ化という流れに逆行しているとも考えられるからである。仮に新 PT のゴールがテストの全てをコンピュータ化することであるのならば、スピーキングとライティングの能力はどのようなテクノロジーを用いて測ることができるのか——文書作成ソフトを使用して作文をタイプさせたり、音声通話ソフトを介してインタビューするというように、現行のテクノロジーを利用して2つの能力を測ることは可能であったが、技術的な制約や限界があり、効率的なアセスメントとは言いがたかった。問題の解決が難航する中で、そもそも PT において産出能力を測る必要はあるのかという問題すらプロジェクトの議題に上ることもあった。ACTFL の基本理念や日本語能力試験 (JLPT) の「Can Do リスト」、ビジネス日本語能力テスト (BJT) の「Can Do レポート」などにも示されているように、近年、「Can Do」、つまり、「日本語を用いて何ができるか」を測るのが、日本語アセスメントの一つのキーワードになっているように感じられる。これを鑑みるに、日本語運用能力を測るということは、受容能力が前提とはなっているものの、やはり、産出能力に重きを置く傾向があると言えるのではないであろうか。

オーラルアセスメントの必要性に関して、Brown (2005) は、ハワイ大学の ELI (English Language Institute) における PT 実施の経験に基づき、「テストスコアだけに頼り被験者の能力を測るのは無責任である。ELI の教師陣が一对一のオーラルインタビューをすることによって、我々はプレースメントテストに『人間味』というものも加味している」と説いている。ハワイ大学 ELI の PT は、聴解・ディクテーション・読解・クローズテスト<sup>5</sup>・アカデミックライティング・ライティングサンプルからなり、受験者の外国語運用能力を多角的に測る試験なのであるが、これだけ包括的な PT であっても、オーラルインタビューを実施することによってアセスメントの確実性が上がると主張していることは、非常に示唆に富んでいる。近藤ブラウン (2012) も、同じくハワイ大学の日本語プログラムの PT について言及し、「毎学期、プレースメント・テストを受ける学習者が二百人いるため」、「主に、受容技能のテスト結果を基に (学習者の日本語能力を) 推定して」いるものの、それでも、プレースメントが適切であるかどうか確認するため、担当教師が授業の初日に自己評価、言語背景アンケート、そして面接などを行うと報告している。

また、より実際的な PT 運用・日本語プログラム運営という切り口からも、スピーキング・ライティングテストの必要性について考察してみた。その取り組みの一つとして、本学の Language Resource Center と連携し、PT のシステム構築に関して、頻繁に意見交換を行った。我々日本語プログラムには、PT を完全にコンピュータ化しても、結局、試験監督は必要になってくるであろうという考えがあった。そこには、小森 (2011) の言う「試験監督者不在による不正行為への対処」という理由もあったが、何より、日本語プログラムの考える PT の理想型というものが関係している。そのビジョンとは、講師が試験監督をするだけに留まらず、日本語プログラムの紹介をしたり、それぞれの学生の専攻や副専攻といった進路相談もしたりする、言わば、オリエンテーション的な PT である。この点に関して、奇しくも、Language Resource Center と日本語プログラムは同じ方向性を持っていることが意見交換を通じて分かり、その後の連携とオリエンテーションを兼ねた新 PT の実現はスムーズに進んだ。

以上のような理論的背景に基づき、また、パイロット版での試行錯誤を経て、新 PT では、文法・読解問題は CBT で行いつつ、オーラルインタビューと作文という形式でスピーキング・ライティング両方のテストも実施することに決めた。そこには、二つの狙いがある。第一に、インタビューでの日本語運用能力と作文での産出能力を、CBT のスコアだけでは判断が難しい受験者をレベル分けするための最終的な評価材料として用いるという狙いである。第二に、講師が受験者と一対一で対話することによって<sup>6</sup>、受験者の日本語学習の動機付けを図り、それを日本語履修者数の増加、プログラム拡充につなげるという狙いである。先述の Brown (2005) の言う「人間味」という言葉を、我々日本語プログラムが持つ PT のビジョンと照らし合わせた時、PT での対面オーラルアセスメントによって、我々は、学生を単なる一受験者ではなく、一個の尊敬すべき個人として扱うことができるのではないかと考えた。つまり、インタビューは受験者の産出能力の測定のためだけに行うものではなく、我々プログラムと学生との間に人間的な関係性を築くためのものなのである。その関係性を築くためには、コンピューターを介してやりとりするのでは不十分、やはり、講師と学習者が一対一で直接向き合う必要がある。そこで初めて、我々の理想とするオリエンテーション的な PT が可能になり、結果として、学生の日本語学習・コース履修の動機付けにつながるのではないかと考えた次第である。

### 3-2. 新入生課との連携

本学では、6月頭から7月末までの二ヶ月間、新入生課 (Office of New Student Programs) が新一年生のためのオリエンテーションを実施している。以前より、ロマンス言語学科は、新入生課と連携して、このオリエンテーション期間中に PT を実施していた。2012 年夏学期から、日本語プログラムも同様にすることになり<sup>7</sup>、2012 年は 31 回、2013 年は 28 回、新入生オリエンテーション期間中に PT を実施した。2012 年、2013 年ともに、試験監督は夏学期のコースを教える講師 1 名が担当し、この業務には給与も発生している。

新入生課との連携により得られたものは大きく、例えば、大学のウェブサイトやフライヤー、オリエンテーションを通して、日本語プログラムだけ行うよりも大々的に、日本語 PT の広報活動を行うことができるようになった。この広報活動は、日本語 PT 受験者を確保できるというだけでなく、もともと日本語に興味がなかった新一年生にも日本語プログラムの存在を周知できるという点で重要である<sup>8</sup>。日本語 PT がオリエンテーション期間中に実施されていなかった頃は、新入生が日本語の PT を受験したいと思っても、結局、オリエンテーション中に実施されている他言語の PT を受験していたのではないと思われる。また、2011 年まで、PT は学期初めのみの実施だったので、学生は新学期まで自分の履修すべきコースが分からず、クラス登録もできなかった。その結果、登録できるコースを優先し、日本語を履修しなかった学生や、取りたいコースに登録できずに日本語の履修を諦めた学生が多数いたと考えられる。新 PT を夏学期中に実施することによって、これらの学生を獲得でき、PT 受験者数と日本語履修者数は増えると予想した。

他にも、メールで当日の PT 受験者数を事前に報告するとか、学生アルバイトがキャンパスの地理に慣れていない新入生を試験会場まで案内するなど、新入生課は試験運用業務に関して細かい手当をしてくれたが、何よりも大きい収穫は、やはり、日本語講師と受験者が個別に対話する機会を得られたことである。夏の PT では 1 回のテストで平均 2 名というように、対応する学生数が少なかったため、一人の学生に多くの時間を割くことができ、5 分のオーラルインタビュー後、日本語プログラムや留学プログラム、日本関係のイベント等を紹介したり、学生の疑問や悩みに答えたり、専攻や履修計画などについて話しあったりすることができた。CBT という形式を取りながらも、学生一人一人の状況に応えられる、人間味を加味したアセスメントが可能になったと言えよう。

### 4. 新 PT とオーラルアセスメントの成果

3-1 で述べたように、新 PT において対面オーラルアセスメントを採用したのには、二つの狙いがあった。一つ目は、判断に迷った際の最終的な評価材料として用いることで、レベル分けの正確さを上げるというものであった。しかし、その狙いに反して、レベル分けをする際、オーラルアセスメントの結果を「文法・読解」の CBT スコアに優先させるということは、めったになかった。稀に、「文法・読解」のスコアが基準点にあと一步届かなかった場合などに、その受験者を希望レベルにプレースすることはあったが、その際の評価材料は、インタビューよりも作文の質に基づくことの方が多かった。CBT のスコアと会話能力に大きな差がある場合も、CBT のスコアに基づいてレベル分けをすることが多かった。これには二つのパターンがあり、まず、会話能力は高いものの、文法や漢字の知識がそれに追いついていない継承語話者の場合は、CBT のスコアに合ったクラスにプレースした。次に、文法や読解のスコアは高いものの、会話が苦手な学習

者の場合も、会話練習中心のクラスに参加することで苦手な会話能力が自然に身についてくると予測して、CBTのスコアに合ったクラスにプレースした。新PTにおけるオーラルアセスメントには、レベル分けの評価材料というより、むしろ、それ以上の役割を期待していたのである。

その「役割」というのが、日本語プログラムの拡充という二つ目の狙いに関係している。新PTとオーラルアセスメントの実施は、この点で大きな成果をもたらした。図1はPTの受験者数と秋学期の日本語履修者数の推移を示している。棒グラフの左はPT受験者数、右は秋学期の日本語履修者数を表している。2007年→2009年→2011年と、PT受験者数及び日本語履修者数は減少しているが、新PTを導入した2012年からPT受験者数が大幅に増加し、それに伴って日本語履修者数も増加していることが読み取れる。

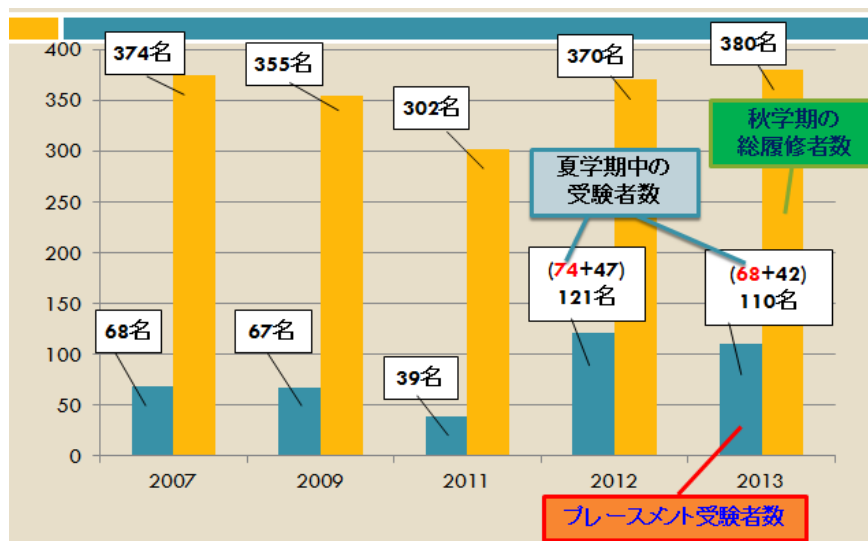


図1：PT受験者数及び日本語履修者数の推移

PT受験者数増加の要因は、明らかに新入生課との連携にある。なぜなら、2012年、2013年ともに、新学期開始時のPT受験者数は以前と変わらないか、むしろ、減っているのであるが、新入生課との連携によって、夏学期中のPT受験者数を大幅に増やすことができたからである。新入生課の大学規模の広報活動のおかげで、例年なら日本語PTを受けなかったであろう受験者を獲得できたこと、新入生が新学期を待つことなく日本語のクラスに登録できるようになったことが、当初の予想通り、PT受験者数と日本語履修者数の増加につながったと考えられる。特に、二年生以上の学年にプレースされ、登録・履修した新一年生の数に顕著な増加が見られた。このように、日本語履修者数の増加というデータは、オーラルアセスメントにおける個別対応の試みがある程度の成功を収めたことを示している。

## 5. オーラルアセスメントに対する学生の反応と考察

新PT実施初年度にテスト全般に関して行ったアンケート（望月・曾我部・遠藤, 2013）では、新PTの一番良かった点として、実際の講師と会話することを挙げる受験者が目立ち、対面インタビューが新入生にとって日本語履修の大きな動機付けとなっている印象を受けた。そこで、2013年度は、インタビューに対する受験者の反応をより掘り下げて探るべく、試験終了後に記述式のアンケートを実施した。受験者110名のうち、回答のあった98名のアンケート結果をもとに、今回実施した対面オーラルアセスメントへの学生の反応と今後の課題について考察したい。

アンケートは英語の自由記述形式で行い、五つの質問からなる。

- Q1. Overall, did you like the interview with the instructor? Why or why not?
- Q2. Have you ever had an oral proficiency interview like this prior to today?
- Q3. Overall, do you think that you fully performed your oral proficiency in the interview?
- Q4. In addition to the computer-based placement test, should we continue in-person oral interviews? Why or why not?
- Q5. What improvements, if any, would you suggest regarding the oral interview/ the placement test?

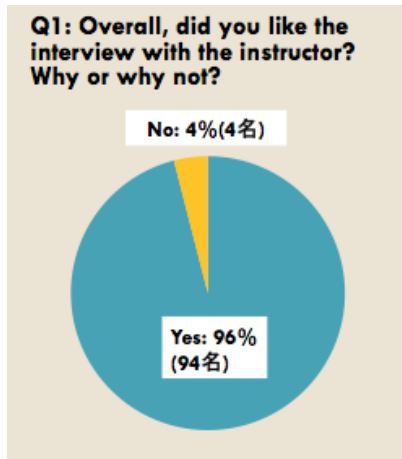


図 2 : Q1 「インタビューテストはよかったか」

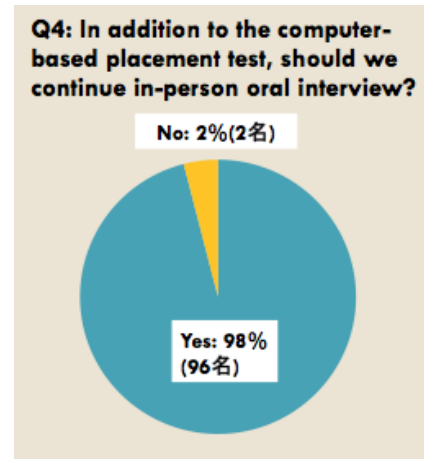


図 3 : Q4 「今後もプレースメントテストで対面インタビューを続けたほうがいいのか」

図 2 - 図 3 : アンケート結果

まず、Q1「インタビューテストはよかったか」に対して、「はい」、或いは、何らかの肯定的な意見を述べた受験者の合計は 98 名中 94 名（96%）であった（図 1 参照）。さらに、Q4 の「今後も、コンピュータを用いたテストに加え、オーラルインタビューを続けたほうがよいか」に対しても 98 名中 96 名（98%）が「はい」と回答し（図 3 参照）、受験者の対面インタビューの反応はおおむね肯定的であった。

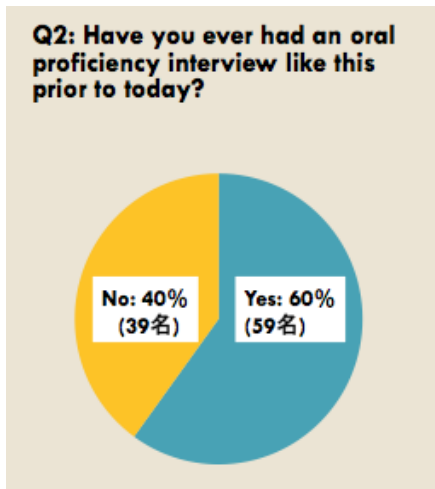


図 4 : Q2 「対面インタビューテストを受けたことがあるか」

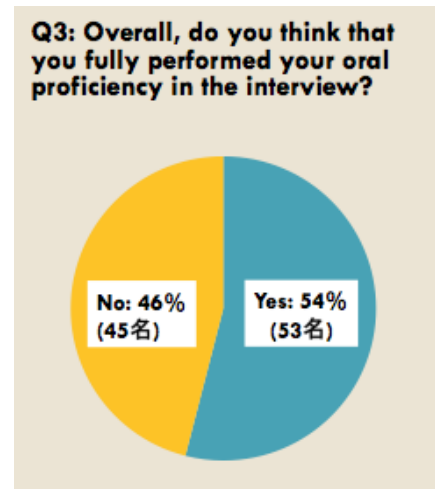


図 5 : Q3 「この日の対面インタビューで自分の実力が出せたと思うか」

図 4 - 図 5 : アンケート結果

Q2 に関して、「何らかのオーラルアセスメントを受けた事がある」と答えた受験者は 59 名（60%）、ないと答えた受験者は 39 名（40%）であった（図 4 参照）。Q3 「この日の対面インタビューで自分の実力が出せたと思うか」については、「はい」と答えた受験者は 53 名（54%）、「いいえ」と答えた受験者は 45 名（46%）であった（図 5 参照）。これらのアンケート結果から、オーラルアセスメントを受けたことがあるかにかかわらず、また、実力が出せたと感じるか感じないかにかかわらず、受験者は対面インタビューを好意的に捉えていることが分かった。

次に、受験者が挙げた「対面インタビューテストが良かった理由」は主に四つである。

- ① 講師に会えてよかった。インタビューをした講師がとてもよかった（42%）
- ② 自然で、リラックスしたセッティングだった（27%）

- ③日本語プログラムのコースのシステムや各コースの概要について知ることができた (14%)
- ④自分の日本語レベルに合ったテストを受けられ、自分のレベルを知ることができた (8%)

このうち、①と③の理由から、アセスメントの質・プレース結果よりも、インタビューで対話した講師の態度やインタビューで得られた情報に満足している受験者が半数以上いることが分かる。これは、先に述べたように、インタビューを行った講師が学習者を「尊敬すべき個人として扱う」という点に留意してアセスメントを実施した成果ではないかと考えられる。たとえ受験者がインタビューの質問にほとんど答えられなかったとしても、すぐにインタビューを終了するのではなく、リラックスした雰囲気の中で、大学の日本語クラスの内容などについて話し、受験者の学習意欲をそがないよう、また、動機を高められるよう留意したからこそ、このような結果が得られたのではないであろうか。さらに、特に新一年生にとっては、初めて出会う大学講師であり、この対面インタビューを通して、自分が日本や日本語プログラム、ひいては大学の印象までも決定し得る立場にあることを担当講師が意識してインタビューを実施したからではないかと考えられる。次に、④「自分の日本語レベルに合ったテストで、自分のレベルを知ることができた」であるが、新PTでは、全てのレベル判定を1つの試験で行うため、初級レベルの受験者には難しすぎる問題も含まれていた。長時間コンピュータの前に座って、多くの分からない問題に取り組むことは、受験者にとってかなりのストレスになっていたようである。従って、文法・読解問題終了後、受験者それぞれのレベルに合わせてインタビューが実施できたことは、受験者のストレス軽減につながったのではないかと考えられる。

アンケートのQ4「今後も、コンピュータを用いたテストに加え、オーラルインタビューを続けたほうがよいか」に対しては、98名中96名が「はい」と回答しているが、この主な理由として、受験者が挙げたのは、次の四点である。

- ①スピーキングは言語活動で最も大切なものであるから (27%)
- ②インタビューで、本当の言語運用能力がわかるから (29%)
- ③インタビューは言語の運用能力がわかる便利なツールであると思うから (11%)
- ④話す能力は文法・読解のコンピュータ形式の試験では測れないから (9%)

ここで、興味深いのは、「インタビューで自分の実力が十分に出せた」と思った受験者も、そうでない受験者も、「話す能力を測るのは大切」「文法、読解問題のみでは、話す能力を適切に測れているとは言えない」と答えている点である。つまり、試験実施側としては、オーラルアセスメントの一つ目の狙い「インタビューの結果をレベル分けの最終的な評価材料として用いる」は、実際にプレースメントを行う際に、当初の予想ほどには有効ではなかったと感じている。しかし、学生側は、対面インタビューによって、コンピュータ上の試験だけでは分からない自分の本当の日本語能力を測ってもらえたと感じているのである。受験者がプレース結果や試験自体に納得・満足できる試験作成は、新PT開発の目的の一つであったが、これが当初意図していなかった方向から、実現したということになるだろう。

## 6. 今後の課題と展望

新PT受験者数と日本語履修者数両方の伸びと受験者へのアンケート結果から分かったことは、オーラルアセスメントを、単なる会話能力を測るツールとしてではなく、オリエンテーションも兼ねて受験者一人一人のニーズに応じた情報を与える場として利用することによって、受験者はテストに満足し、プレース結果にも納得し、それが日本語学習の動機付けにつながるということである。その一方で、一年生の日本語にプレースされた新入生の多くが、日本語を履修していないという見過ごせない状況もある。これは、高校である程度日本語を学んできた既習者が、一年生にレベル分けされ、また一から勉強をやり直さなくてはいけないことを知り、自信ややる気をなくしたのが原因なのではないかと考えられる。このような受験者とのような対話をすれば、日本語履修へ導けるのかを今後の課題としたい。

新PTの成功は、CBTというフォーマットによる試験運用業務の効率化や、試験自体の質の向上によるところが大きいのはあるが、同時に、Language Resource Centerと新入生課という日本語プログラムの外の機関と連携したことで、日本語プログラムのみでは実現不可能なことを成し遂げられたという点を見逃すことはできない。講師と学習者が一対一でじっくりと向き合い対話する場合は、Language Resource Centerと新入生課との連携なくしては、実現し得なかったはずである。それぞれの教育機関でシステムや状況は異なるので、全ての日本語プログラムが、本学のような環境でPTを実施するのは難しいかも知れない。しかし、少なくとも、日本語プログラムを学部・学科・プログラム内だけで完結させるのではなく、大学の他機関と連携し



て何かプロジェクトを起こすことを、我々は提案したい。そうすることによって、きっとプログラムだけでは解決し得ない大きな問題に取り組むことも可能になるだろうし、その延長線上に日本語プログラムの拡充や日本語教育の発展というものがあるのではないであろうか。

---

注：

- 1) 新 PT 開発プロジェクトの初期（2010年5月）に計 25 校の日本語プログラムを対象に行ったアンケート結果による。
- 2) 先に述べた時間配分は、あくまでもこちらが想定したもので、受験者は自分のペースで試験に取り組み、文法問題が終わり次第、読解問題に移る。また、初級の受験者は中・上級の問題を解く必要がないため、より短時間で試験が終わる傾向がある。
- 3) <https://lessons.umm.umich.edu/2k/>
- 4) 旧 PT では、試験結果は個別に学生にメールで知らせていた。
- 5) 内容に結束性のある文章から、特定の間隔ごとに機械的に単語を抜き、空欄を埋めるのに適当な語を記入させる形式のテストを指す。
- 6) 対話の内容は、プログラムの紹介や進路相談、作文の内容などについてである。
- 7) その背景には、Language Resource Center との対話や、日本語プログラムが所属するアジア言語文化学部からの要請があった。
- 8) 他大学の日本語プログラム拡充の試みについて、学会やワークショップなどで学ぶ機会があるが、日本語に興味のない層（例えば、法学部・工学部・ビジネススクール）を引き込むというアプローチが多いように思われる。

### 引用文献・参考資料一覧

小森和子（2011）「プレースメントテストのオンライン化の試みと問題項目の分析評価」『九州大学留学生センター紀要』19, 89-106.

小山由紀江（2010）「テストの歴史的変遷とコンピュータ適応型テストの意義」『New Directions』Vol. 28, 13-15.

近藤ブラウン妃美（2012）『日本語教師のための評価入門』くろしお出版

望月良浩・曾我部絢香・遠藤賢司（2013）「コンピュータを用いたプレースメントテストの開発と成果：大学日本語プログラムの拡充を目指して」The 2013 American Association of Teachers of Japanese Annual Spring Conference 発表原稿.

Brown, James, D (2005). *Testing in Language Programs: A Comprehensive Guide to English Language Assessment*. New York, NY: McGraw-Hill.